

広域管轄団地農道整備事業（長野県伊那西部地区）

—緊急発掘調査報告—

# 小沢原遺跡

1985

伊那市教育委員会  
南信土地改良事務所

広域営農団地農道整備事業(長野県伊那西部地区)

—緊急発掘調査報告—

# 小沢原遺跡

1985

伊那市教育委員会  
南信土地改良事務所

## 序

小沢の集落は伊那市地域では西部地区に該当する場所に位置し、伊那市内では天竜川の有力な支流である小沢川の右岸河岸段丘面上に立地しています。河岸段丘崖面にはいたるところに湧水がみられ、現在でも小沢区の住民はこの水を日常生活に利用しています。このような自然的条件が満ち足りているために、両岸段丘面上に多くの遺跡が存在しています。なかでも、左岸段丘面上に存在している月見松遺跡は伊那市内で最大であり、しかも、その名は全国的に広く知れわたっています。

小沢の台地にも開発の波が押し寄せてまいりました。これとともに埋蔵文化財が危機に直面するようになってきました。これらを現状のままで保存するには社会的諸々の条件によって不都合が生ずるので記録保存という方策を実施致しました。

今回、報告する小沢原遺跡は広域営農団地農道整備事業（長野県伊那西部地区内）に該当し、工事着工以前に南信土地改良事務所より委託を受けた伊那市教育委員会が発掘調査団を結成し、調査を実施致しました。

発掘の成果は報告書に述べてありますように、土壙5基、井戸址1基、炉址1基であります。

報告書の刊行にあたっては、この発掘調査の実施に深い御理解と御指導下さった南信土地改良事務所職員一同、適切な判断、指導、助言、処置をして下さった友野良一団長を始めとする調査団の各位に対し深甚なる謝意を表する次第であります。

昭和60年2月

伊那市教育委員会

教育長 伊沢一雄

## 凡　例

- 1 今回の発掘調査は小沢原遺跡緊急発掘調査報告書とする。
- 2 この調査は広域営農団地農道整備事業（長野県伊那西部地区）に伴う緊急発掘で、事業は南信土地改良事務所の委託により、伊那市教育委員会が発掘調査団を結成して調査に当たった。
- 3 本調査は昭和59年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡単にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。
- 4 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

飯塚政美

◎図版作製者

◦遺構及び地形実測図

友野良一　　飯塚政美

◦土器拓影　　飯塚政美

◦石器実測図　飯塚政美

◎写真撮影

◦発掘及び遺構　　友野良一　　飯塚政美

◦遺物　　友野良一　　飯塚政美

- 5 本報告書の編集は主として伊那市教育委員会があたった。

## 目 次

序	
凡 例	(1)
目 次	(2)
挿図目次	(2)
図版目次	(2)
第Ⅰ章 環 境	(3)
第1節 位 置	(3)
第2節 地形・地質	(3)
第3節 周辺遺跡との関連	(3)
第Ⅱ章 発掘調査の経過	(5)
第1節 発掘調査の経緯	(5)
第2節 調査の組織	(5)
第3節 発掘日誌	(6)
第Ⅲ章 遺 構	(8)
第1節 土 壤	(8)
第2節 炉址及び井戸址	(12)
第Ⅳ章 遺 物	(13)
第1節 土 器	(13)
第2節 石 器	(14)
第3節 陶磁器	(14)
第Ⅶ章 まとめ	(15)

## 挿 図 目 次

第1図 伊那西部地区遺跡分布図	(4)
第2図 グリット及び遺構配置図	(9)
第3図 第1号土壤実測図	(11)
第4図 第2～5号土壤実測図	(11)
第5図 炉址及び井戸址実測図	(12)
第6図 土器拓影	(13)
第7図 石器実測図	(14)

## 図 版 目 次

図版1 遺跡遺景	
図版2 グリット発掘	
図版3 遺 構	
図版4 遺 構	
図版5 遺 構	
図版6 遺構及び遺物出土状況	

# 第Ⅰ章 環境

## 第1節 位置

小沢原遺跡は、長野県伊那市小沢区中小沢部落に所在している。遺跡地までの道順としては、伊那市街地から小沢川に沿って4km程西へ上って行くと、目の前に南北に長く走る中央自動車道の白いコンクリート壁を仰ぎ見る。小沢川には、大きな橋梁が重々しく立っている。この橋付近が小沢区下小沢部落である。下小沢部落と西方の中小沢部落の境付近に、道路より南側に伊那西保育所が建っている。この保育所から西方へ500m位行ったところに中小沢橋が架っている。この橋を渡り、南へ200m程行くと、段丘崖面へ至る。この付近から道路はカーブが多くなり、さらに傾斜を増す。この段丘を登り切った面が小沢原遺跡である。

## 第2節 地形・地質

小沢原遺跡地付近の地形・地質は全てと言ってよい程に小沢川の影響をうけている。わずかではあるが疊層の中に三峰川系統の石を含んでいた。これは三峰川が押し出した時にこの小沢台地にも及んでいたことを実証してくれる。

ここで『伊那市史自然編』により小沢川水系の諸特徴及び状態、起因を記してみると次のようになる。『伊那市西部地域を縱断する水系で、木曾山地の南沢と北沢地籍に発し、東に流下し、天竜川にそそいでいる。流域は伊那市の竜西地域の河川のなかでは広い方に属する。途中、西天竜用水路の水が、発電に利用されたのも小沢部落付近（川北地籍上方）で合流している。後背山地である木曾山地が近く、こう配も急で、流路距離もみじかく、したがって、流量、流速の変化もげしい。特に、水田耕作終了後において西天竜用水の小沢川の放流は急激に流量も増し、流量、流速とも天竜川にそそぐ付近は危険をともなうくらいである。また、全体的にみても流量、流速の変化も激しい河川であるので、水害の危険が内在していると考えられる』

地層はごく一般的であり、上から耕土、ソフトローム層、ハードローム層、疊層の順であった。ローム層までは地表面から50cm～1m位とまちまちであった。

## 第3節 周辺遺跡との関連

伊那西部地区で今までに発掘調査を実施した遺跡名とその所在地、さらに検出された遺物を記してみると次のようになる。

八人塚遺跡（平沢）一縄文中期竪穴住居址7軒、土墳1基。おぐし沢遺跡（横山）一平安時代堅

## 第1章 環 境

穴住居址1軒、中世土墳1基。丸山清水遺跡(平沢)一縄文中期堅穴住居址20軒、ロームマウンド1基、土墳1基。平安時代堅穴住居址3軒。ますみが丘遺跡(小黒原)。船窓遺跡(船窓)。誠畠遺跡(大坊)。赤坂遺跡(小黒原)一縄文中期土墳1基。伊勢並遺跡(小黒原)一縄文中期堅穴住居址1軒。八人塚古墳(小黒原)一横穴式石室。狐塚南古墳(小黒原)一横穴式石室。山の神遺跡(小黒原)一縄文中期土墳1基。城楽遺跡(小黒原)一縄文前期末土墳1基、縄文後期土墳1基、ロームマウンド1基。月見松遺跡(下小沢)一近世の経塚、縄文前期堅穴住居址1軒、縄文中期堅穴住居址103軒、縄文中期土墳901基、平安時代堅穴住居址8軒、中世火葬墓3基、中世城跡。高尾遺跡(山寺区高尾町)一縄文前期堅穴住居址1軒。

第1図伊那西部地区遺跡分布図でみてもらえば一目瞭然であるが遺跡の分布状態は現在の集落のある所と大体合致している。河川の近くとか、山麓線上の湧水のあるところに集落を営んでいるのが現状である。小黒原台地の中央部付近には水がなく、現在でも集落の発達はあまりみられない。従って遺跡も極めて少ない。(飯塚政美)



第1図 伊那西部地区遺跡分布図 (1 : 50.000)

### 遺跡の名称

- ①北 方 沢 ⑥穴 沢 ⑪上 手 原 ⑯八人塚古 墳 ⑰富 士 塚 ⑯ウグイス 墳 ⑯今 泉 宮 の 前 墳
- ②矢 塚 畑 ⑦ますみヶ 丘 ⑬城 畑 ⑯城 樂 ⑯狐塚南古 墳 ⑯城 樂 ⑯上の 山 ⑯原 墓 外 ⑯清 水 洞
- ③八 人 塚 ⑮船 窓 ⑯ますみヶ 丘 ⑯狐塚北古 墳 ⑯小 沢 原 ⑯高 尾 ⑯かんぜん ⑯牧 ケ 原
- ④おぐし沢 ⑯風 平 2 ⑯赤 坂 ⑯山 の 神 ⑯小沢神社 ⑯鳥 居 原 ⑯御園東部
- ⑤丸山清水 ⑯風 平 1 ⑯伊 势 並 ⑯小黒原 ⑯月 見 松 ⑯石 塚 ⑯御園南部

## 第Ⅱ章 発掘調査の経緯

### 第1節 発掘調査の経緯

広域當農団地農道整備事業（通称、大規模農道事業）に伴なう緊急発掘調査は、過去、昭和48年度に西箕輪大萱にある大萱遺跡、西春近山本にある北条遺跡、常輪寺下遺跡、昭和49年度に西春近城にある小出城（城南）遺跡、西春近宮の原にある宮の原遺跡、昭和52年度に西春近白沢、南小出にある見塚遺跡、昭和54年度に西春近沢渡にある南丘C遺跡を実施致しました。

本年度は伊那小沢にある小沢原遺跡が該当しました。南信土地改良事務所長より伊那市長へ発掘調査計画書と発掘調査予算書の依頼がありました。伊那市長より南信土地改良事務所長へ前述した計画書を提出致しました。南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。

伊那市教育委員会は南信土地改良事務所より委託を受け、小沢原遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。

### 第2節 調査の組織

#### 小沢原遺跡発掘調査会

##### 調査委員会

委員長	伊沢 一雄	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢總一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	山口 豊	伊那市教育委員長
調査事務局	小林 勝	伊那市教育委員会教育次長
"	竹松 英夫	社会教育課長
"	柘植 晃	" 課長補佐
"	武田 則昭	" 係長
"	高木いづみ	" 主事

##### 発掘調査団

団長	友野 良一	日本考古学协会会员
副団長	根津 清志	長野県考古学会会員
"	御子柴泰正	"
調査員	福沢 幸一	"
"	飯塚 政美	日本考古学协会会员
"	小池 孝	"

## 第3節 発掘日誌

昭和59年6月13日 晴 発掘器材の整備を行う。

昭和59年6月14日 晴 発掘器材の整備を行う。

昭和59年6月15日 晴 発掘器材を西箕輪羽広の伊那市考古資料館から小沢の発掘現場までトラックにて運搬する。

昭和59年6月18日 晴 テントを東西に長く2張り建てる。

昭和59年6月19日 曇時々雨 発掘地区の東側をⅠ区、その西側をⅡ区とする。Ⅱ区のグリットを最初に設定する。南から北へA～H、東から西へ1～10と決め、1辺を2m×2mとする。グリット設定後、ただちにグリット掘りをはじめる。Ⅱ区のA2、C2、E2、G2、A4、C4を掘る。表土面から60cm位でローム層に達す。ローム層は南から北へやや傾斜気味である。土器片が少量出土。遺構は何も検出されなかった。

昭和59年6月20日 曇時々晴 Ⅱ区E4、E6、E8、G4、G6、G8、C6、A6、A8を掘り下げる。発掘風景の写真を撮影する。

昭和59年6月21日 晴 Ⅱ区A10、A12、A14、A16、C8、C10、C12、C14、C16、E10、E12、E14、E16、G10、G12、G14、G16グリットを掘る。発掘風景と、今まで掘ったグリットの写真を撮影する。

昭和59年6月22日 曇時々雨 Ⅱ区A18、A20、C18、C20、E18、E20、G18、G20を掘り下げる。土器片が少量の出土。

昭和59年6月23日 雨、雨のため作業中止。

昭和59年6月25日 雨、雨のため作業中止。

昭和59年6月26日 雨時々曇、本日は雨が降ったり、やんだりの状態であったのでⅠ区の草刈りをする。

昭和59年6月27日 雨のち晴  
雨のため作業中止。

昭和59年6月28日 晴時々曇  
Ⅰ区の草刈りを実施する。Ⅱ区A22、A24、A26、C22、C24、C26、E22、E24、E26を掘る。A24に黒い落ち込みがみられ、第1号土壤とする。第1号土壤の掘り下げ及び拡張をする。

昭和59年6月29日 雨時々晴  
雨のため作業中止。

昭和59年6月30日 晴 Ⅱ区A



グリット掘りを開始する。

### 第3節 発掘日誌

28, A30, A32, A34, C28, C30, C32, C34, E28グリットの掘り下げを完了する。Ⅱ区C28のローム層面に石をもった黒い落ち込みがみられ第2号土壌とする。

昭和59年7月2日 晴 Ⅱ区C28に発見された第2号土壌を拡張するとともに、その掘り下げを実施する。

昭和59年7月3日 晴 第2号土壌付近の拡張をする。Ⅰ区のグリット打ちをする。南から北へA～K、東から西へ1～28とし、そのおののの辺を2m×2mとし、一つおきに掘ることにする。

昭和59年7月4日 晴後雷雨 Ⅰ区の掘り下げをする。

昭和59年7月5日 晴時々雷雨 Ⅰ区の掘り下げをする。

昭和59年7月6日 晴時々雨 Ⅰ区の掘り下げをする。

昭和59年7月7日 晴 Ⅰ区の掘り下げをする。

昭和59年7月9日 晴 Ⅰ区の掘り下げ及びⅠ区全測図作製

昭和59年7月10日 晴 Ⅰ区の掘り下げをする。

昭和59年7月11日 晴 Ⅰ区の掘り下げを実施。Ⅱ区の全測図作製。

昭和59年7月12日 晴 Ⅰ区の中央部付近に黒く、多量の木炭が発見された。これを炉址とする。炉址の掘り下げを終了。炉址の東側に落ち込みがみられる。

昭和59年7月13日 晴 炉址の完掘。写真撮影ができるように清掃をする。昨日検出された落ち込みを精査していくと井戸状の遺構になった。

昭和59年7月14日 晴 都合により現場は休み。

昭和59年7月16日 曇時々雨 Ⅰ区の第1号土壌、第2号土壌の掘り下げを実施。第2号土壌を清掃していくと西側に落ち込みがみられ、これを第3号土壌とする。

昭和59年7月17日 曇時々晴 Ⅱ区の第1号土壌から第5号土壌、Ⅰ区の井戸址、炉址の清掃及び写真撮影の終了。第1号土壌から第5号土壌の実測終了。

昭和59年7月18日 雨時々曇 Ⅰ区の炉址及び井戸址の塗装。炉址、井戸址の実測終了。

昭和59年7月19日 晴 発掘器材のあとかたづけ、器材を運搬する。

昭和59年7月20日 晴 器材のあとかたづけをする。

昭和59年11月～昭和60年1月 図面の整理、原稿執筆、報告書の編集、報告書を印刷所へ送る。

昭和60年2月 報告書を刊行する。  
（飯塚政美）

#### 作業員名簿

酒井岩夫 池上大二 三沢寛 大野田英 建石紀美子 大野田三千代 綱野実子 後藤重美  
大久保富美子 酒井とし子 唐木由人 柴佐一郎 工藤りよ子（敬称略順不同）

## 第Ⅲ章 遺構

## 第1節 土壙

今回の発掘調査で検出された土壙は5基であった。5基のうち3基から水神平式土器片が出土した。土器の出土したのは第2号土壙、第3号土壙、第4号土壙であった。

## 第1号土壙（第3図、図版3）

II区A24、A25のグリットにまたがって発見され、中央部に小ピットを有する土壙である。平面プランは若干角張った所もみられるが全般的には円形である。規模は南北1m55cm、東西1m40cm、深さ62cm位を測る。床面中央部付近に南北25cm、東西25cm、深さ30cmの小ピットがある。

本土壙の掘り込み面までは表土面から70cm位あり、ソフトローム層面を掘り込んで構築してある。全般的に壁面は外傾が強く、軟弱であった。南壁と東壁両面にわずかに段が認められた。床面は大般水平で堅くなっていた。遺物は何も出土しなかった。覆土は黒色土で充満していた。

## 第2号土壙（第4図、図版3）

II区C28のグリットに検出された土壙である。平面プランは円形を呈し、規模は南北80cm、東西75cmを、深さ42cmを計る。表土面より50cm位下ったソフトローム層面を掘り込み、覆土は黒色土である。

壁はやや外傾気味であったが、軟弱で凹凸が多くあった。床面より35cm位浮いて4個の石が敷いてあった。これらの石は緑色を呈する三峰川流域に産している。床面は大般水平で、軟弱であった。遺物は石の付近より水神平式土器片が出土した。

## 第3号土壙（第4図、図版4）

II区C27、D27、D28の3グリットにかかるて発見された土壙である。

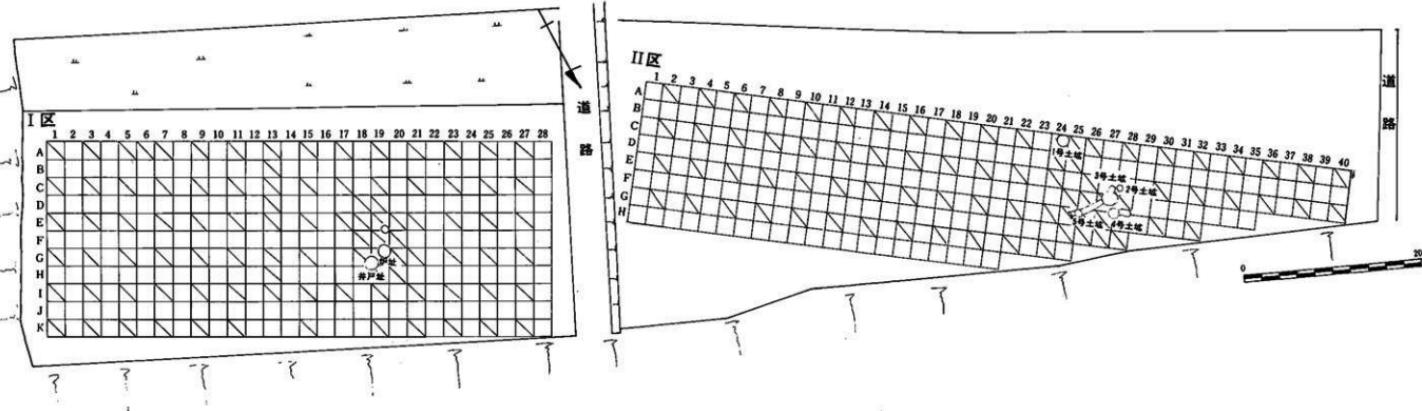
平面プランは円形状を呈し、規模は南北1m50cm位、東西1m60cm位、深さ70cm位を計る。本土壙に接して南側に南北1m位、東西85cm位、深さ10cm位の大きなピットが、西側に小さなピットが存在していたが、本第3号土壙との関係は不明である。

覆土は黒褐色土で、表土面より50cm位下ったソフトローム層面を掘り込む遺構である。壁面は外傾気味で、凹凸が多く、軟弱気味であった。床面は大般水平であり、ローム層自体をかたくたいてあり、その状態は良好な方に属する。

遺物は水神平式土器片が出土した。付近に小ピットが発見されたが、配置状態が明瞭でないので本土壙に結びつくのかは現段階では不明である。

## 第4号土壙（第4図、図版4）

本土壙は第3号土壙に接して検出された。規模は南北1m15cm、東西1m25cm、深さ38cm位を計る。平面プランは円形状を呈している。西側に本土壙に接して不定形の落ち込みがみられたが、本遺構との関係は不明である。このことはP<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>も同様である。



第2図 グリッド及び造構記載図



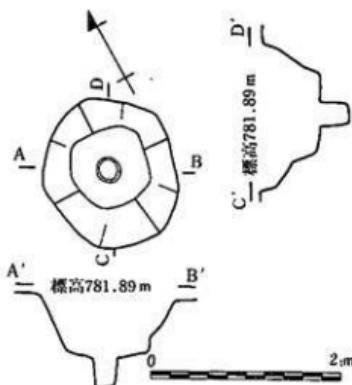
壁面は南側で外傾気味、北側で内湾気味を呈し、やや軟弱で、凹凸があった。床面はやや水平気味で軟弱であった。遺物は水神平式土器片が出土した。

#### 第5号土塚（第4図、図版4）

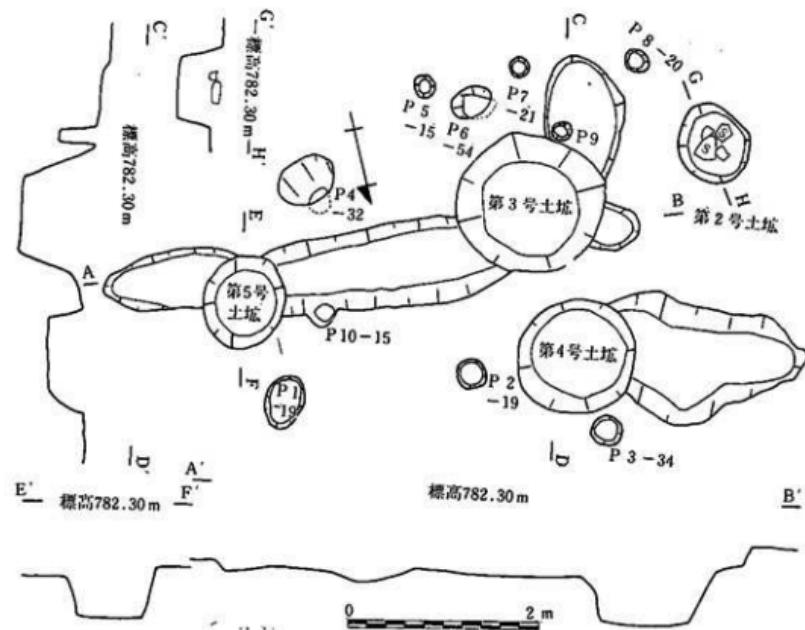
II区E26付近のグリット内に発見された土塚である。規模は南北95cm、東西85cm、深さ50cm位を測り、円形状プランを呈している。

壁面は外傾気味で、凹凸が多く、堅くなっていた。床面はやや堅く、水平であり、細縫を含む。壁面の下部に細縫を多く含んでいた。造構の掘り込み面は表土面から1m位下ったソフトローム層面を掘り込んでいる。

遺物の出土は何もなかった。（飯塚政美）



第3図 第1号土塚実測図



第4図 第2～5号土塚実測図

## 第2節 炉址及び井戸址 (第5図、図版5~6)

本題目のように炉址と井戸址を一連の遺構と考えてみた。炉址はI区F19, G19, G20にかけて検出された。表土面より80cm位下ったローム層面を掘り込んで構築は構築されてあった。この一帯は過去3回にもわたって水田造成をしたとみえて、その度ごとの層位状態が明瞭であった。

規模は南北1m15cm位、東西1m25cm位、深さは30~40cm位を測る。断面はややすりばち状を呈す。従って、壁面は外傾気味を成し、堅くなっていた。焼土はすりばち状の掘り込み面から中程にかけて赤々と堆積していた。炭化物は掘り込み面の上層部に集中していた。

底面に近いところに変成岩を敷き詰めていた。石の配列状態を調査してみると次のようなことがわかった。炉底の中央部に平坦状の石を敷き、北、西、南側には比較的大きな石を並べ、東側には小さな石を二重に配してあった。全般的に中央の平坦状の石を中心にして同心円状に置いてあった。これらの石の傾斜は内傾気味で、すりばち状の壁面傾斜とはほぼ一致していた。

炉石の東側には炭化物が多量に付着、西側には焼石が多かった。炉内からの遺物の出土は何もなかった。周辺からは若干ではあるが陶器片が出土した。

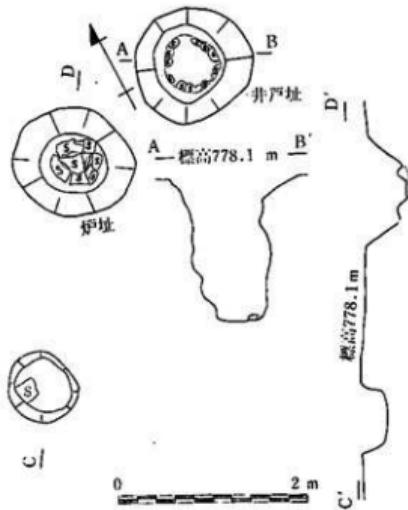
井戸址はI区G18, H18, G19, H19の4グリットにまたがって検出された。表土面から60cm位下ったソフトローム層面を掘り込んで構築してあり、その規模は南北1m20cm、東西1m20cm位、深さは1m55cm位を測る。平面プランは円形である。底面プランも円形であり、その規模は50cm前後位である。断面は掘り込み面から30cm位下った面までは外傾が強く、それより下層は壁面がデコボコ状になっていた。断面は全般的に断面フラスコ状を呈していた。

井戸址を構築してある断面の土層は掘り込み面から80cm位下ったところまではソフトローム層。その下はハードローム層から成っていた。

床面に近いところは小砂利混じりの礫層が底面の壁面に沿って全周しており、細礫が露出していた。

覆土は上部が黒色土、中部が茶褐色土、下部が細礫を含む砂層であった。遺物の出土は何もなかった。以上、炉址と井戸址の事を述べてきたわけであるが、構築当初は炉址、井戸址を中心にして、掘っ立て柱が存在したことと思われるが前述したように水田造成によって破壊されたことは誠に残念である。付近の遺物より中世末期か、近世初頭につくられたと思われる。

(飯塚政美)



第5図 爐址及び井戸址実測図

## 第Ⅳ章 遺 物

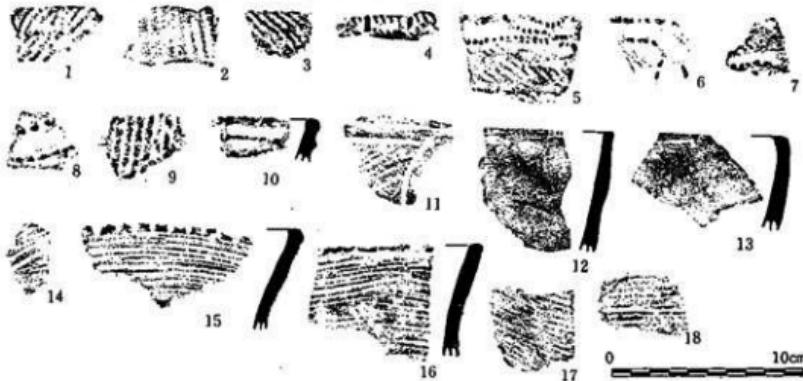
## 第1節 土 器 (第6図)

(1～3) は幅広ろの斜縞文が器面全面に施されている。(1, 3) は黒褐色, (2) は赤茶褐色を呈し, 焼成は不良(1, 3), 良好(2)であった。3片ともに少量の長石粒を含む。縞文前期末葉と思われる。(4) は斜縞地に細いソウメン状の粘土組を縦位に貼り付けてある。少量の長石や蟹母を含み, 赤茶褐色を呈し, 焼成は良好である。(4) は関西地方の大歳山式であろう。

(5～7) は斜縞文地へ低く, 細い隆帯を横位に数条貼り付け, その上へ刻目を連続的に施してある。赤褐色(5, 7), 黒褐色(6)を呈し, 全般的に少量の蟹母を含み, 焼成は普通である。関東地方の十三菩提式土器の一派と思われる。(8) は無文地に低い隆帯を貼り付け, その上に間隔をもって刻目を施してある。白灰色を呈し, 焼成は良好, 少量の長石粒を含む。4mm位と極めて薄い。薄い点と色の具合からして北白川下層の新しい時期に含まれると思われる。

(9) は無文地に沈線を無数にわたって, 縦走, あるいは斜走させてある。赤茶褐色を呈し, 焼成は不良, 大きな長石粒を含んでいる。(10) は無文地に幅広のヘラによる沈線が2本横走している。黒褐色を呈し, 長石粒を多量に含み, 焼成は普通である。(9～10) は縞文中期後葉加曾利E式の一派と思われる。(11) は斜縞文地へヘラによる沈線が横位や斜位に施してある。明茶褐色を呈し, 少量の長石を含み, 焼成は普通である。加曾利E式の新しい方と思われる。

(12～13) は無文地の中へわずかに擦痕がみられる。明茶褐色を呈し, 少量の長石を含み, 焼成は良好である。縞文晚期後半と思われる。(14) は外面に無雜作に条痕がつけられている。明茶褐色を呈し, 焼成は良好で, 少量の長石を含む。(1～14) の土器片は遺構外から出土している。(14) は水神平式土器に含まれると思われる。



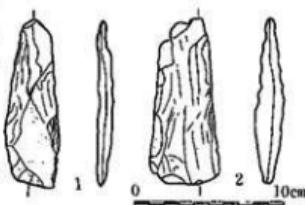
第6図 土器拓影

## 第Ⅳ章 遺物

(15~18) は遺構内から出土した土器片である。(15~16) は第2号土壙、(17) は第3号土壙、(18) は第4号土壙である。これらの土器は外面全体に条痕文が無数に横位状に施されている。(15~16) は口唇直下に刻目を装飾風につけ加えてある。(15) は暗赤褐色、(16, 18) は明黄褐色、(17) は明赤褐色を呈す。焼成は全般に良好で、少量の長石を含む。(16~18) の土器片外面に炭化物が付着している。(15~18) は水神平式土器の古い方に属していると思われる。

### 第2節 石器 (第7図)

今回の調査で出土した石器は数点であった。その内、主だった石器を2点掲載した。(1~2) はともにグリット内から出土した。(1) は下部がわずかに開く撥型の打製石斧であり、小型の部数に属し、断面は薄い。砂岩質の石を用いてある。(2) は上部がわずかに欠損している。(1) と同様、下部がわずかに開く撥型の打製石斧であり、下端部がわずかに分厚くなっている。変成岩を用い、巧みに調整してある。



第7図 石器実測図

### 第3節 陶磁器

今回の発掘調査で出土した陶磁器片は全部で10片を数える。これらの内訳は古瀬戸天目茶碗3点、古瀬戸灰釉碗2点、近世の白磁碗2点、近世の有田焼藍色染付茶碗1点、古瀬戸鉄釉擂鉢2点であった。細片だったので実測図は割愛した。

全般的にみて、室町末期から近世初期に該当すると思われる。大部分が炉址及び井戸址付近から出土している。

(飯塚政美)

## 第Ⅴ章 まとめ

今回の発掘調査面積は概算で2000m<sup>2</sup>位に達している。調査面積が多い割には遺構の検出は少なく、わずかに土壙5基、炉址1基、井戸址1基のみであった。土壙5基のうち遺物を出土したのは第2号土壙、第3号土壙、第4号土壙であり、いずれも東海系水神平式土器片の古い方が出土している。炉址と井戸址は住居形態及び距離的にみて同一住居に伴なう遺構と考えてよからう。周辺より出土した陶磁器片からみて中世末期から近世初頭頃と断定できえよう。

前述した遺構の形状及び形態については前を参照して致だき今回は割愛する。土器については諸磯系統の繩文、大歳山式、十三善提式、北白川下層の新しい方、加曾利E式、大洞A式、水神平式の土器片が数は少ないが出土している。前の四形式の土器の出土は繩文前期後半から終末期にかけて、伊那の地に、南関東、瀬戸内海、京都付近の文化伝播を裏付けてくれる確固たる証拠である。石器類は全て繩文中期に位置づけられると思われる。

水神平式土器片出土は次のようなことを実証づけてくれる。水神平式土器は東海地方から天竜川沿いに稻作技術とともに北上したのだと定説化されている。現在、水神平式土器は伊那市内では中村遺跡（西春近下島・中村）、倉ヶ入遺跡（東春近田原）から出土している。これら二カ所の遺跡はいずれも天竜川河岸段丘面上にあって、水田は天竜川の氾濫原を利用して稲作が行われていたと思われる。今回的小沢原遺跡出土の水神平式土器は弥生前期後半にはすでに天竜川水系の支流の奥地まで稲作技術が浸透し、水田が存在していたことを強く実証してくれる一例であろう。

炉と井戸がセットになった同時代の遺跡は、福井県福井市一乗谷朝倉氏館跡の町屋の建物跡が著明である。この建物跡は間口6m、奥行13mで、小さな石を土台石に用い、井戸を伴なっており、これが一般的とされている。今回の調査では土台石の存在は実証できなかった。これは過去三回にわたり水田造成が実施されたために破壊されたと想像できる。井戸の使用された時代は建物が存在したと思われる。また、小沢川の対岸には月見松の中世城館跡が存在しているので、それとの関連性も考えてみる必要性もある。小沢原遺跡は繩文前期後半から江戸時代までの複合遺跡であった。

最後に、発掘調査に全面的に御協力下さった各位に対し厚く御礼申し上げます。

（飯塚政美）

# 図 版



遺跡地を北東側より眺む



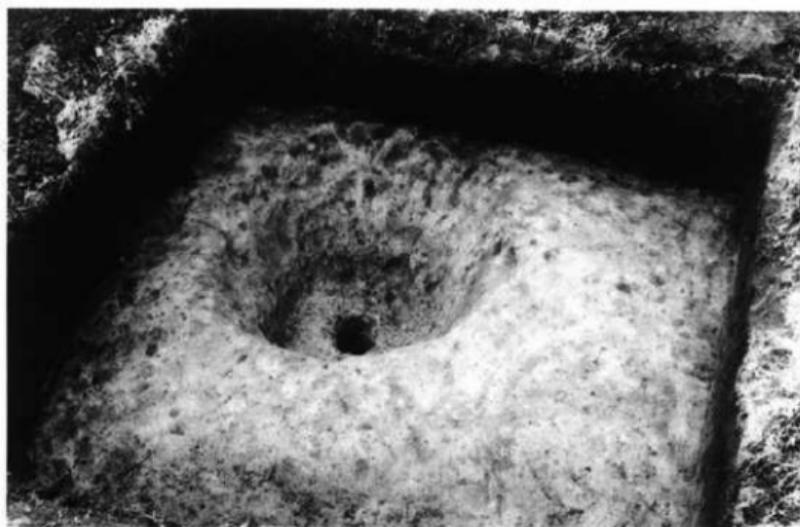
遺跡地を東側より眺む（工事完了後）



I区のグリットを西側より眺む



II区のグリットを東側より眺む



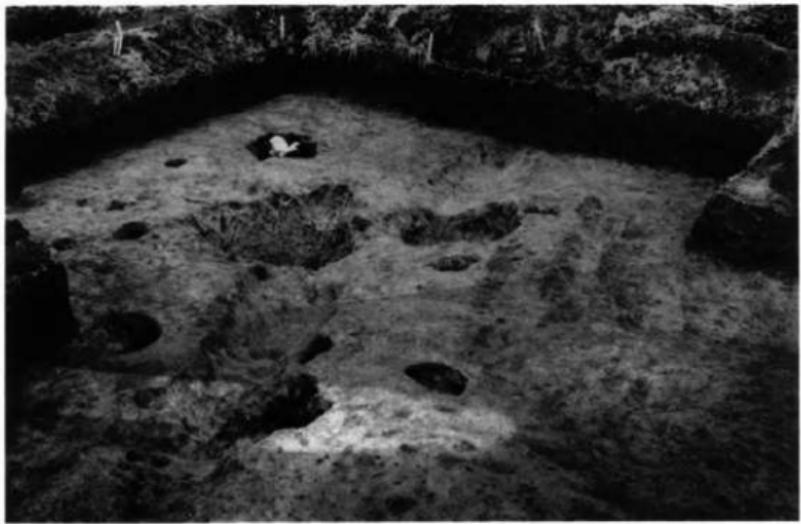
第1号土壤



第2号土壤



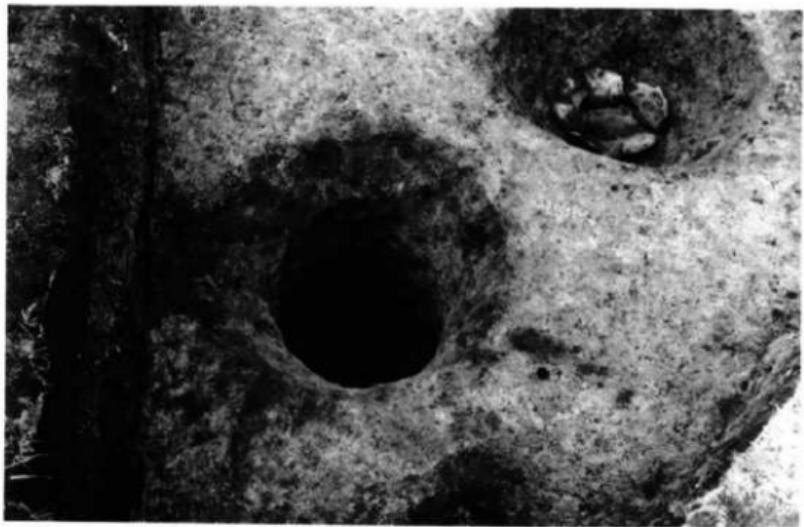
第2～5号土壙(南側より眺む)



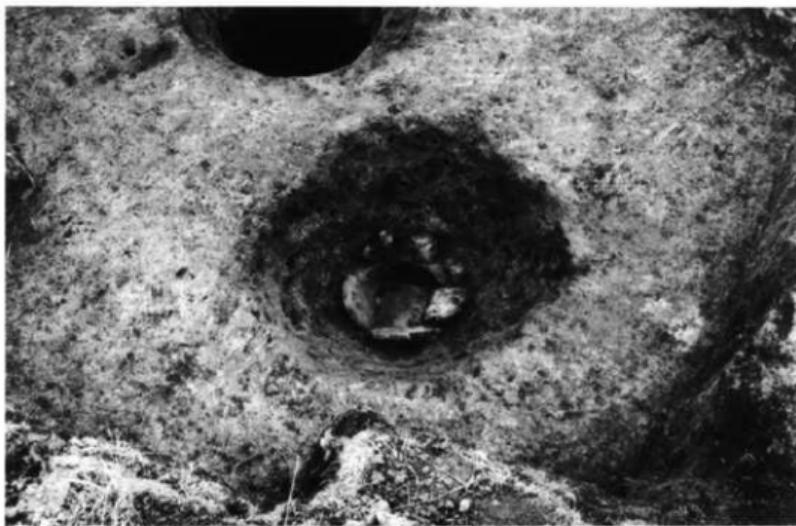
第2～5号土壙(北側より眺む)



炉址及び井戸址配置状況



井戸址全景



炉址全景



土器出土状況



土器出土状況

---

---

## 小沢原遺跡

—緊急発掘調査報告—

昭和60年2月25日 印刷

昭和60年2月28日 発行

発行 長野県伊那市教育委員会

印刷 ほおづき書籍株式会社

---

---

